

法的判断の正しさと真理の整合説、そして問答

早瀬 勝明 (甲南大学)

法的な問題に正しい答えはあるか。法的三段論法は機械的形式的に唯一の結論を導くわけではなく、同じ法的問題に人によって異なる答えが出されることは、よく知られた事実である。複数の答えが提出されたとき、いずれかが正しいのか。それとも、複数の答えが出てくる法的問題に正しい答えなどなく、どれが正しいのかと問うこと自体が間違いなのか。

本発表は、法哲学者ロナルド・ドゥオーキンの理論を検討の素材とし、法的判断の正しさと真理の整合説との関連性について考察を行う。その際、入江幸男の「問答」の理論を参照する。法的判断は様々な場面で行われるが、ここでは裁判所の判決など、裁判官が既存の法的ルールを根拠として下す判断を想定している。

裁判官が司法権を行使して法的な決定を下す際に根拠とするのは、法令の条文や先例である。ただ、法文や先例を参照するだけでは目の前の法的な問題に対する答えが明らかにならない場合がある。そして、いかなる法的決定がなされるべきかについての意見の相違が生じる。同じ事案について裁判官同士の意見が割れることは現実によく見られる事態である(だからこそ、例えばアメリカの連邦最高裁判事の人事は政治的に重要な問題となる)。

この意見の相違は、法的な問題に判断を下す個人の価値観の違いに由来するものであり、いずれかが正しいわけではない、とする立場がある。一方で、法解釈などの法的判断のプロセスから価値判断を排除しようとする論者もいる。ただし、法的判断から価値判断を排除する試みの成功例はない。

ドゥオーキンは、いずれの立場もとらない。彼は、法の解釈適用に価値判断が含まれることを認める。その上で、裁判官は、法制度が求める条件に従って、法文や法定者の意図、先例などに拘束されつつ法的な判断を行うのであり、裁判官の判決は個人的な選択ではないと言う。そして彼は、法的問題には正しい答え(right answer)があると主張する。

ドゥオーキンの理論には、次のような重なり合う3つの主張が含まれる。

- (ア) 法的判断には価値判断が含まれる。
- (イ) 法的判断には正しい答えがある。
- (ウ) 価値判断には正しい答えがある。

本報告は(イ)を中心に検討を行う。(イ)を否定する見解に対してドゥオーキンは、議論に参加する法律家が想定していない「正しさ」を前提として「法的判断には正しい答えがない」とする主張は無意味だと言う。彼によれば、法律家が新しい事案について考察するとき、そこでは、これまでに積み重ねられてきた法の制定や裁判所の先例との首尾一貫性を目指した議論が行われる。法実務において、新たな法的決定は、法体系の整合性を維持するものでなければならない。異なる作者によって次々と書き継がれていく連鎖小説(chain novel)の続きを書く作者には、これまでの記述との首尾一貫性や物語全体の整合性をはかりつつ、小説全体をより良いものとする物語を書くことが求められる。これと同様に、裁判官達には、目の前の事案について、先例等との首尾一貫性や法体系の整合性を維持し、また法制度全体をより良いものとして理解することが可能となるような、法的決定を

下すことが求められる。

過去の法的決定を参照しても明確な答えが見つからないとき、裁判官は、自らの裁量で法的決定を下すのではなく、過去の法的決定と整合的な決定を下さなければならないのであり、整合性を満たした法的決定こそが正しい答えだとするドゥオーキンの理論は、真理の整合説と親和性が高い。

しかし、問題点も共通する。法的な問題について整合性を満たす複数の答えが提出される可能性があるのだ。ドゥオーキン自身、彼の法的判断方法に従った場合でも意見の相違がありうることは認めている。そうであれば、法的問題について「正しい答え」の存在を肯定することはできないのではないか。

本発表は、以上のような問題の所在を前提とし、法的判断の正しさとは何かについて考察する。検討の手がかりになりそうなのは、真理を命題について語られることではなく、問答関係について語られることとみなす、入江幸男の真理論である。法的判断の正しさを巡る問題は、唯一の正しい答えが実際に存在するのではなく、「正しい答えかどうか」という問いが法制度の中にどのように組み込まれているのか、というものではないか。裁判官に示されている問いはどのようなものを議論することが、法的判断の正しさに関わる問題の進展につながるのではないか。以上のような視点から検討を行う。

法的判断の正しさの問題は、法学の枠に収まるものではない。本発表の考察は、法学と哲学の両方にまたがるものとなる。

(主要参考文献)

- Dworkin, Ronald. (1986). Law's Empire, Harvard Univ. Press (小林公訳『法の帝国』(未来社、1995)
- 入江幸男『問答の言語哲学』(勁草書房、2020)